

かわさきパラムーブメント推進フォーラム
第2回推進会議 議事録

日時 平成28年2月15日(月)18:00~20:00
会場 川崎市役所 第三庁舎 15階第1・2会議室
出席者
委員長 福田市長、成田委員長
顧問 中森顧問、日々野顧問
委員 遠藤委員、大塚委員、小倉委員、菊地委員、五島委員、島委員、杉山委員
土岐委員、北條委員、山田委員、横島委員、須藤委員、宮本氏(ロー委員代理)
オブザーバー JOC 中森氏
事務局 滝峠総合企画局長、唐仁原都市経営部長、久万企画調整課長、
山本企画調整課担当課長、佐藤企画調整課担当係長

議題 開会

市長あいさつ

議事

- (1) かわさきプロジェクト取組状況について
- (2) 分科会の開催結果について
- (3) 取組提案について
- (4) かわさきパラムーブメント推進ビジョンについて
- (5) その他

公開・非公開の別 公開

傍聴者 5名

開会

(山本課長)

ただいまから「かわさきパラムーブメント推進フォーラム」第2回推進会議を開始させていただきますと存じます。私は、市総合企画局都市経営部調整課担当課長の山本と申します。議事に入るまでの間、私が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしく お願いいたします。

はじめに、本日の会議は公開とさせていただいておりますので、マスコミの記者の方々の取材や傍聴を許可しております。あらかじめご了承くださいと存じます。傍聴者の皆様には、本日受付にてお渡しいたしました遵守事項、こちらをお守りくださいますよう、よろしく お願いいたします。また、会議録の公開に関してでございますが、公開に際しましては、発言の内容を記録し、発言者の氏名も含めて公開してまいります。公開にあたりましては、議事録が作成でき次第、各委員の方の承認を経て、公開させていただきたいと思っております。なお、議事録の作成をお願いしております、民間会社の方も同席させていただいておりますので、あわせてご了承くださいと存じます。

それでは会議に先立ちましてお手元にお配りしております資料の確認のほうからさせていただきます。

- 次第、要綱、席次表、
- 資料1 「かわさきパラムーブメント推進！かわさきプロジェクト 取組事例」
- 資料2 「平成28年度東京オリンピック・パラリンピック関連予算について」
- 資料3 「かわさきパラムーブメント推進フォーラム 分科会 議事録」
- 資料4 「これまでの議論のポイント」
- 資料5 「取組提案検討資料」
- 資料6 「推進フォーラム発リーダーディングプロジェクトについて」
- 資料7 「かわさきパラムーブメント推進ビジョン(案)の概要について」

●資料8「かわさきパラムーブメント推進ビジョン案」

●資料9「かわさきパラムーブメント推進に向けたスケジュール案」

また、本日、成田委員長、天野委員、瀬戸山委員、中澤委員、中村委員はご都合によりご欠席となっております。それでは、福田市長から皆様にご挨拶を申し上げます。市長、よろしく願います。

市長あいさつ

(福田市長)

皆様こんばんは。皆様大変お忙しい中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。第1回が昨年10月でしたので、かなり時間が経っておりますが、この間皆様から様々なご提案をいただき、そして2回にわたる分科会で様々なディスカッションをいただき、ご協力に対しても感謝を申し上げたいと思っております。

そして第1回から様々な状況が変わりました。まず2月8日に英国選手団が事前キャンプに等々力陸上競技場を含む川崎市とそれから横浜市と慶應義塾大学日吉キャンパス、この3拠点で事前キャンプを行うことになりました。今年はリオのオリンピック開催の年でもありますから、何かと市民の皆さんもオリンピック、パラリンピックに向けて機運が徐々に高まってきているかと思っております。

事前キャンプの調印式の時に、挨拶で申し上げましたが、オリンピック憲章の第一章、一番最初のところにオリンピックムーブメントは何かということが書いてありますが、要約すると、スポーツを通じて若者たちを教育して、平和でよりよい社会を構築することにあると。スポーツを通じてですが、目的はよりよい社会をつくることだと。ある意味、社会変革を促していく、絶えずそれをやり続ける、ということが本質でありますので、そういった意味で、このパラムーブメントというものは、本当に社会変革を促す取組をやっつけていかなくては行けないかと思っております。そういった意味で、ムーブメントですので、市民の皆様をいかに巻き込めるか、そういったことにかかってくるかと思っております。

いただいたご提案を、それぞれのプロジェクト、あるいは推進ビジョンの中に盛り込んでいくということですので、今日もぜひそれぞれのお立場で活発なご議論をいただき、いい成果を、出発に立てればと思っております。今日も2時間の予定ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

(山本課長)

ありがとうございました。

本会の議長については委員長である福田市長がつとめます。ご了承のほどよろしくお願いいたします。福田市長、議事進行をよろしくお願いいたします。

議事1 かわさきプロジェクト取組み状況について

(福田市長)

はい。では議題の1、かわさきプロジェクト取組状況についてでございます。前回の10月16日、第一回推進会議が行われてから、いろいろ状況が動いておりますので、まず委員の皆様へ情報提供のお時間をいただければと思っております。それでは事務局から説明をお願いします。

資料1、2説明

(山本課長説明)

(福田市長)

ありがとうございました。ただ今の説明に関しまして、皆様からご意見ご質問いただきたいと思います。JOC、JPCからご参加いただいている顧問の方から一言ずつご意見ご感想などいただければと思っております。

(日比野顧問)

どうも日比野でございます。ただいまの説明の中にもありましたように、ちょうど一週間前ですけれど、2月8日イギリス代表のセバスチャン・コーを迎えまして、無事に事前キャンプの協定ができました。セバスチャン・コーの挨拶の中でも、こうした取組が有効であるというお褒めの言葉もいただきまして、今後2020年に向け、ぜひ我々も協力していきたいと思っております。神奈川県横浜市、慶應義塾大学、川崎市で、立派な事前キャンプができればいいと思っております。ご協力よろしくお願ひいたします。

(福田市長)

ありがとうございます。では、中森顧問よろしくお願ひします。

(中森顧問)

感想を一言で言うと、障害者の当事者の観点がちょっと抜けているのかなという気がいたします。ぜひ当事者がパラリンピックを見るという取組を川崎でやって、川崎の障害者が実際目の前で見るということと、当事者がパラリンピックの種目を、スポーツを実際経験できる場、これをぜひつくってほしいと思います。参加できる障害なのに、たとえば車いすバスケ等やったことがない。これが現状です。見ることで変わるということと、ぜひ川崎にいる障害者の皆さんにそういうスポーツの経験をしてもらいたいと思います。町を変えていったり、色々な取組をやりながら知名度を上げたり、そういうことも大事かと思いますが、実際当事者がどう変化していくのか、当事者が日本の社会の一端を担っていくような、そういう意識が薄かったかと思います。ぜひまだ間に合うと思うので、考えていただければと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。少し補足させていただきますと、今、中森事務局長がおっしゃったように、市のほうでも、統計として、障害の当事者の方たちの6割近くの方がスポーツ、レクリエーションの経験がないといわれている数字もあります。そういうところをしっかりと取り組んでいくために、10月に市の障害者スポーツ協会を立上げ、市のスポーツ協会とも連携して取り組んでいるということで、今言われたようなことを当事者目線で挑戦していきたいと思ひます。

それでは委員の皆様からご意見、ご質問などございましたら、お願ひいたします。

(菊地委員)

今の意見を聞いていて、私どもはクラブで障害者スポーツを毎週開催しておりまして、小さいエリアではございますが、障害を持つ方々と楽しく過ごさせていただいております。特に子どもたちを中心に、あるいは周りでサポートしてくれている方々のご意見としてまさに、おっしゃったようですね、なんとかしてパラリンピックに参加できないものだろうか。もちろん競技では出ることはなかなか難しいと思ひますけれど、具体的な案として、障害を持った人たちがオリンピックの開会式のお手伝い、たとえばプラカードを持たしていただくとか、すごく熱い夢を抱いている子どもたちがたくさんいるということをご報告させていただきます。

(福田市長) ありがとうございます。

(小倉委員)

川崎市には県の養護学校がありますが、そこでパラリンピックのいろんな競技を一緒に体験するだとか、当事者の子どもたちにそういう機会を与えるようなプログラムをぜひつくっていただきたいと思ひますね。

(山田委員)

関連することですが、川崎市の障害をお持ちのみなさんの、実態というか、ジュニアも含めて、この方はサッカーという具合に、どういったスポーツに関心があるのか、やってみたいのか、スポーツに関心がないのか、現状把握が大事じゃないかと思ひます。

(福田市長)

ありがとうございます。さきほど紹介したのはスポーツとレクリエーションという、ざっくりとしたアンケート結果でありますけれど、当然特別支援学校とかですと、どうなっているか、ある程度実態は把握されている部分はあるかと思ひます。

(山本課長)

まず、本市の中の状況といたしましては、川崎市身体障害者協会内に設置いたしました障害者スポーツ協会ではですね、今、ボッチャや卓球などの、10団体が加盟しているという状況がございます。地域全体のスポーツの状況と申しますと、なかなか数字として把握しているものがないといったところが正直な状況でございますので、今おっしゃられているところについては、調査が必要と思います。

(福田市長)

地道なところで、地元でしっかり把握していく必要がありますよね。

(中森顧問)

今現在のパラリンピックのほうは、パラもデフも含めてですけど、障害者スポーツで国際大会を目指す人は強化選手になっています。われわれ強化の予算をつけるのに、まず名簿をもらっています。ですから、川崎市から選ばれている代表選手、パラリンピック強化委員会から助成を受けている選手のリストはおそらくすでに市のほうに送っています。出した理由は、市の方で、場所が無いとかコースが無いとか、医学的な支援が無いとか、栄養士とか、そういう相談したい人が多いと思うんです。そういう人には面談をして、ヒアリングをして、行政として何ができるかということをやってほしい。そのために名簿を渡しています。

(福田市長)

ありがとうございます。中森さんの言われるところはトップアスリートのお話ですよ。いわゆる、そこからパラリンピック種目でもない競技も含めて、裾野の低いところから見ていかなければならないということもありますね。

(中森顧問)

それは川崎で選手、要は日本代表を目指している選手が練習とか、いろんな場面で困っていることは底辺だって同じです。やりたくても近くに無いとか、代表選手は経験してきたことです。それを乗り越えてきたのが強化選手なので、その人たちにヒアリングすれば、課題がどんどん出てくると思います。その中で変えていけることを変えていくのも、一つの方法論としてあるかなと思います。

(杉山委員)

根本的な話になるかと思いますが、今回のオリンピック、パラリンピックで障害者の方にいろんなスポーツをやっていただくのは非常に重要かと思いますが、私も含め、運動が苦手な人もいます。必ずしもスポーツではない参加の仕方が、さきほど菊地さんがおっしゃっていたように、あるのかなと思っています。ロンドンでも文化プログラムでも15万件近く行われ、日本でも20万件の文化プログラムという話があります。もちろんオリンピック、パラリンピック、そういう障害者の方々が中心になって、あるいは関わりを持つ方々と一緒になって、川崎でもそういった文化プログラムをテーマの中に入れていただいても良いと思います。

運動音痴ですが、見るのも好きですし、頑張っている方々を見て勇気をもろう、そういうのは好きなので、参加の仕方をもうちょっと広げていただけると良いと思います。

(遠藤委員)

質問一つと、コメントですが、英国の事前キャンプの話が先ほどありましたけれども、キャンプ以前の活動に対して、何かこう英国との絡みはあるのかということと、それに対してパラリンピックも含めた英国キャンプかということをお聞きしたい。

(福田市長)

まず、イギリスのパラリンピック、BPA(英国パラリンピック委員会)のほうには働きかけをしております。で、実はBOA(英国オリンピック委員会)とBPAは全く別組織で動いてますので、BOAが決まったからといって、BPAがついてくるとは限らない。せっかくだからBPAにしっかりと働きかけていく、ということは今やらせていただいているところです。

事前キャンプが実際に行われる以前ですが、ホストタウン構想というのがありまして、今、杉山さんが言われたような文化プログラムですとか、さまざまなホストタウンとしての取組が、市民を巻き込んで何をやっていくか、これから議論が始まる場所ですので、単純にキャンプの数週間だけではない、という風にとらえていただければと思います。

(遠藤委員)

はい、わかりました。

(中森顧問)

補足ですけど、イギリスのオリンピック委員会とパラリンピック委員会のメンバーも一緒に来てましたよ。一緒に来ていろいろ探ってました。たぶん川崎も視野に入っているとは思いますが、実際パラリンピックの選手の生活の部分、ホテルの宿泊とか輸送とか、車椅子の人が30人ばっくと泊まれるホテルが川崎の等々力競技場の近くにあるのかどうか、無ければもっといい所を探すとか、パラリンピックは4年前から、いや、5年前から動いてますね。だから今、一生懸命調べているような状況かと思います。

(福田市長)

実際に川崎の等々力陸上競技場も見に来ていただいているようです。

(大塚委員)

ぼく自身、障害者になってまだ6年半くらいなんですけど、実は地元の車椅子バスケットのチームに誘われまして、そこに、うちの会社もですが8社ぐらい集まって始めたんですね。それで何がスポーツをやるきっかけになるかという、実はそういった試合を見ることも重要なことである一方で、やりたいといっても、金銭面が追いつかない方が多いです。我々がお金を出し始めたのは、競技用の車いすを買ってくださいと、地元の企業が集まって、お金を出し合うような協力の仕方をやっていますが、実際車椅子バスケットの車一台買うのに安くても50万、自分の体にフィッティングさせようとすると、70万、80万という風に競技用の車椅子はものすごく高いので、それがやはりスポーツに対して前向きにならないところの原因の一つになっていると思います。あとは、中森顧問のおっしゃっていたように、場所の問題であったり、そこに行くまでの交通手段が、自分で車を持っていらっしゃらない方がバスケットを持ってバスに乗れるかということ、これは乗れない。そういった部分の整備が必要になってくると感じております。

(遠藤委員)

それに付け加えたいのですが、等々力競技場、我々も使わせていただいて本当に感謝していますが、同じ競技団体もいらっしゃって、車椅子の方もいるんです。その方々は車寄せに車を止めることができません。「なんとか止められませんか」と言ったら、「玄関まで歩いてきて、窓口に言ってください」というのは、たぶん対応できない人もいます。それはたぶん、嫌味ではなく、知らないから、今までこれでやっていたから、というのであって、言って変わることを。それをたぶん、市長なので、何かしらの手順で変わられるようにしないと、使える現状にはならないのかなあと感じます。

(福田市長)

ありがとうございます。

議題2 分科会の開催結果について

(福田市長)

次に議題の2つ目です。11月に分科会を開催いたしましたので、事務局からの報告をお願いします。

資料3、4説明

(佐藤係長説明)

(福田市長)

分科会での指摘を、本当に簡単にまとめたのが資料4ということでありますので、今の説明で、補足、あるいは皆さんで共有しておきたいということがございましたら発言をお願いいたします。

(須藤委員)

今のご説明の中の、インクルージョンという部分は不可欠な要点だと考えています。その中で、やはり、かつてのオリンピック、パラリンピックというのは、主催者団体も違えば、開催環境のずれがついこの間までございました。もとをたどれば、障害者のスポーツというのを考えた時、いわゆるパラリンピックの障害者スポーツという風に見ますと、かなり身体的な障害者に限られるという点は否めないと認識しています。他方、国連の差別禁止条約の批准を受けました、

いわゆる精神障害、知的障害、この方々が、先ほど小倉委員のコメントにもありましたけれども、たとえば、養護学校、特別支援学校に数多く存在しているわけでございます。従って、一つ私から申し上げたいのは、今回のパラムーブメントは推進していくべきではございますが、障害者の一つの定義というか、枠組みは、身体障害者のみならず、知的・精神障害も緩やかに含むと理解してよろしいでしょうか。

(福田市長)

おっしゃった通りで、身体に限らず、すべての障害者ということですよ。

(須藤委員)

ありがとうございます。

(島委員)

今の、須藤さんのお話を聞いていて思ったんですけども、やはりこれから2020を一つの目標にしつつ、それ以降、川崎市の中で、ダイバーシティとインクルージョンの社会づくり、そして継続して続いていくベースづくりということで、私ども委員に求められている提案課題だと思いますが、出来る限り裾野を広くつくりこむという意識を持って、たとえば、先ほど中森顧問がおっしゃられた、アスリート、トップアスリートというような方の育成と同時に、まだスポーツというものを知らない障害者、そういった人たちが、同じ思いでつくったベースの上ののって行くという風にしていただければと思います。養護学校であったり、特別支援学校であったり、当初はその学校の子どもたちだけでと思いますが、一般の子どもたちと一緒にスポーツができたり、レクリエーションが楽しめるような機会を数多く積み重ねてつくっていただきたい。それが本当にインクルージョン教育ということにつながっていくでしょうし、その中でいろんな障害者の方の、能力、好き嫌いがあると思うので、よりトップアスリートに向かう人材も輩出できますでしょう。杉山さんがおっしゃったような、もっと多彩な文化面で才能を発揮するような、あまり「ザ・障害者」というグルーピングだけの中ではなくて、ごく普通に、障害者の程度も、健常者との境も薄まっていく営みになっていくことを常に意識していただけたと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。今おっしゃっていただいたポイントもすごく大事だと思いますが、先ほど中森顧問から言われたような、トップアスリートの所から発見されるニーズは、実はベースの、こんなところが足りていないという気付きにつながります。先ほど遠藤委員から言われたような話も、実は知らないということによって、サイボーグに参加されているまさにトップアスリートの人たちがそこに来るといったときにもそういう対応をとってしまう。あるいはハードの面でも意識の面でも全然足りてない。そこはピラミッドの上の話をしていても、ベースは同じということが共通認識として必要だと思います。障害者だけのパラムーブメントではないし、この世の中全体がそのベースにのっていかないと、スポーツだけという話では社会変革は起きないのかなと思います。

(北條委員)

パラムーブメントというとなんとなく新しい動きということが想定されると思いますが、現実の問題としては、パラの人のスポーツ、アートなんかを考えますと、すでに市内でかなりいろんなことをやられているんですね。その人たちは大変苦勞してやっていますし、それをまた支えているのが多くのボランティア・サポーターです。ですから現状のところをもう少しきちっと把握して、その人たちをどう応援していくのか、その先にやはり新しいものが出てくるというのがありますので、大変多くの団体がスポーツでも文化でも苦勞されていますし、またそれを支えているのが市民だということも、きちっとやっていかなければいけないかなと思っています。そういう意味で私は今回の件では、みんなで支え合うということと、人と団体をきちっとサポートする、ということを提案をさせていただきたい。

(横島委員)

裾野を広げるということでは、川崎市の身体障害者協会の中でも、スポーツイベントをいくつかやっているところですが、あらゆるスポーツがあっても、参加される方がある程度固定されているのが課題です。毎回参加されて顔見知りということもありますが、せっかく協会がやっているのも、もっと裾野を広げるということで活動していきたいと思っています。ただ、そういった方々でも、「じゃあ、どこで練習しているんですか」と聞くと、「川崎はちょっとないんだよね」

「どこでやっているんですか」「横浜ラポール」という名前が常に出てくる場面があって、川崎にもそういった施設をつくっていただきたいと思います。

議題3 取り組み提案について

(福田市長)

それでは次の議題は取組の提案についてでございます。分科会での議論、また庁内での議論もございまして、いただいた提案に対して、どのような取組をするか、方向性を整理いたしましたので、事務局から説明をいたします。

資料5、6 説明

(佐藤係長説明)

(福田市長)

はい、短期間ではありましたけれども、28ものご提案をいただきまして本当にありがとうございました。それぞれ私どもの、行政としての受け止めができていくかということは、まだまだと思いますが、リーディングプロジェクトとして先にスタートするプロジェクトを4つほどあげさせていただいております。今事務局から説明がありましたように、年度の途中でも熟度の高まったもの、できるものからどんどん発進させていく、そういった認識をしていただければと思っております。ぜひこのプロジェクトについても、提案されていない方でもこうやったらどうだろうという意見、また補足などいただければと思いますが、いかがでしょうか。

(中森顧問)

我々の日本障害者スポーツ協会のオフィシャルスポンサーは23社あるわけですね。でこの23社もやはり障害者スポーツに何らかに関与したいということで、そういう取組をされています。一番発展的にやっておられるのが三菱電機さん。障害者のイベントをやると社員がたくさん参加して、パラスポーツを応援しているんだという取組をしています。川崎には大手企業がたくさんあるので、市長の声かけで、この「かわさきパラムーブメント」に皆さん参加しませんかという呼びかけをしていただいて、企業の皆さんに参加していただく。その中で具体的にここに出資する、いくつかの企業で共同で出資する、という取組ができると思います。企業は方向性を示せば、社員もそっちを向いてくれると思います。そういうのは可能性は高いような気がします。先ほど、バスケットで8社集まったと具体的に言われたので、それは1クラブに対してそうだけでも、市もそういう観点でやっていくのがいいのかと思います。行政だから難しい部分もあるかもしれませんが、そういうやり方もあるのかと思いました。

(福田市長)

ありがとうございます。川崎には大企業から小さな企業まで、ほんとにたくさんの企業があるので、実はJOCさんとやらせていただいたアスナビも商工会議所の山田会頭を中心として、スポーツ協会の皆さんとやらせていただいた経緯があります。

(山田委員)

これは重要な視点だと思います。川崎商工会議所としても、大企業、中小企業に呼びかけたいと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。

(山田委員)

先ほどの大塚会員の話がありましたけれども、大口のスポンサーだけではなく、小口のスポンサーを数多く協賛してもらえよう呼びかけをしていきたいと思っております。

(福田市長)

ありがとうございます。

(中森顧問)

市長さんが呼びかける社長さんが向くと思うんですよね。そうなると一気に盛り上がると。

(福田市長)

ぜひ先頭に立って呼びかけさせていただきたいと思います。山田会頭がおっしゃった、アスナビの時もお1人の方を1社でというスキームですけど、中小でも、何社かがまとまった形で競技スポーツを、パラスポーツを応援するとか、クラブ、チームを応援するとか、そういう手法というのは考えられるかと思います。

(中森顧問)

すでに九州ではされていますね。

(中森顧問)

麻生グループさんが、基本的には1社1人というやり方をしているんですけども、できないところは10社で1人を雇用して、雇用した選手は給料もらって強化をする。ただ、企業のイベントに選手が出るとかね、そういう約束事をしているので、麻生グループのシーズアスリートというクラブです。

(遠藤委員)

選手たちはそのお金で練習するのですが、お金を払っていただいた会社にマッサージをしにくとか、そういった活動もされてると聞いています。

(山田委員)

そういった事例について情報をいただけませんか。

(中森顧問)

シーズアスリートはホームページとか公開しているので、そこから情報を得ることができます。僕も詳しくはよくわかってなくて、概要は教えてもらって、それから選手からいろいろ聞くわけです。賛同する企業が集まって、シーズアスリートとして全体のイベントたとえばパラリンピックに行く前に壮行会を開いたり、報告会をやったり、けっこう面白いなあと思っています。

(福田市長)

今日も先ほど大塚さんも、それこそ遠藤さんも、こう事例出していただきましたけれど、いろんな事例たぶんあると思うんです。私たちも事務局としてもしっかり情報収集に努めますが、こんなのあるよというのに気がつかれましたら、ぜひご一報ください。

(JOC中森委員)

JOCの中森です。アスナビの事業はJOCが障害者スポーツ協会さんと契約いたしまして、JOCのほうが一括してやらさしていただいておりますが、本来の目的は社員としてその会社に就職して、現役時代は会社にお世話になるけれど、現役を引退した後は会社のため、社員として尽くすんだというポリシーで進めさせていただいております。スポンサードという形ではないこと、現役だけのスポンサードではないということが、ちょっと基本になっております。けれども東京大会に向けては、いろいろな形があっても、それは差し支えないのかなと思います。

(杉山委員)

我々飲食店のネットワーク進めておりますので、全体ではないと思うんですけども、関東圏の話なんですけれども、障害者を受け入れる実態について、一部ですがデータをとらせていただいております。受け入れを積極的に行っているかということに対しては、意識的に受け入れているというのは25%ほどで、75.2%は意識的に障害者を受け入れるという取組はまだできていない。これは外国人に対するものと似ているデータです。2年前のデータですけども。実際、これはちょっと厳しい意見になるかもしれませんが、飲食店から見て、積極的に障害者を受け入れたいというものに関しては、4%、受け入れたいというのも48%、足しても56%くらい。受け入れたくないというご意見もあるんですけども、50%くらいの方が「わからない」と答えておまして、おそらく、どういう対応していいかわからないとか、どういうトラブルが起きるかわからない、知らないというところがほうが各事業者さん多いと思います。各自でどういう準備をしなければいけないとか、どういう対応が必要かということ、特に事業者さんにお伝えしていただくのが必要かと思っています。

飲食店様にとって、一方で、受け入れることによるどういう利点があるかということをお聞きしたら、一番大きかったのがリピーターを連れてきていただくということでした。障害者のお客様が使いやすい、居心地のいいお店なので、お友達を連れてきてリピーターになっていただける。お店にとってもリピーターづくりは非常に難しい状況になっていますので、そういったメリットや、社員のモチベーションアップにつながる、社員のサービス向上になるというよ

うな意見もありました。やはり事業の利益につながっていくような話をしていく必要もあるかと思ひます。これ飲食店だけの視点で申し訳ないんですけども、他の業者さんにも同じような利点はあるのかと思ひますので、そういった意識付けとか勉強会をこの会の中でやっていくのが良いかと思ひます。

(福田市長)

ありがとうございます。そういう意味では杉山さんのアクセシブルシティかわさきと、4番のバリアフリープロジェクトと、レストラン単体でバリアフリー化やっても良いですね。まさに動線の問題でありますから、関係してくるところでありますよね。

(中森顧問)

アクセシブルの話をするときに、完璧に話がそういう方向に進んでいけばいいんですけど、できない間は誰がやるかっていうと、やっぱり人がやるわけですね。さっきも話に出ましたけれど、人が支え合う社会という観点を併行してやっていかなければならないという。これをやるためには、せつかく川崎市がやっているのですから、まず市の職員が笑顔で挨拶して、譲り合う、こういうものをそういうムーブメントとしてそれ以外にも広げていく。たとえば自治会とか。それをやっていかないと、アクセシブルが主流になってしまうと、できない人はできないままで、困っている人がいたら助けることを併行してやっていくべきかと思ひます。

(福田市長)

第1回目の成田共同委員長のご挨拶にも、冒頭にそんな言葉がありました。ハード面も大事だけれど、もっとハートをというようなお話で、とても大事だと思ひます。

(菊地委員)

私のNPOは今高津区スポーツセンターの指定管理をやらせていただいております。スポーツセンターが地域スポーツの核になっておりますので、7つのスポーツセンターと等々力アリーナはこの事業にも積極的に取り組んでいくべきではないかと思ひています。まず、バリアフリーに関してはですね、様々な改修の計画をしているところでございますが、先ほど横島委員がおっしゃったように、横浜にはラポールという立派な施設がございますが、川崎には残念ながら無い。これを今つくれといっても難しい話ですから、7つのスポーツセンターが、一つ一つのプログラムを組んだらどうかと思ひます。車椅子バスケットですとか、シッティングバレーですとか。けれどもそういった備品がまず足りないですね。これは指定管理者にやっていただくか、市の予算でやっていただくか、これからご検討いただくとしても、プログラムづくりというのをスポーツセンターで検討ができるのではないかと思ひております。

(福田市長)

ありがとうございます。いずれのリーディングプロジェクトも、さきほど北條委員が言われた、様々な地域の中で活動していらっしゃる方々と、どのように連携してやっていくかというのは大事な視点だと思ひますので、何か突拍子もない新しいことというより、今までやってきたことを巻き込んでやっていくという、そういうスタンスでやっていかなければと思ひております。

(小倉委員)

さきほどのレストランですとか、食事をするところの調査について、市の職員で車椅子の方がいらっしゃいますので、そういう職員の協力も必要なんじゃないかと思うんですよね。場所は別に特別でなくても、椅子をはずすくらいはやってくれるレストランですとか、やっぱりトイレが確実に入れるところ、入り口が広いところ、駐車場があるところ、そういう条件がいくつかありますが、実際に彼女と話をしていて、彼女に言われたところを毎回グループで使っています。

(福田市長)

ありがとうございます。このリーディングプロジェクト、まず4つ走り始めますけど、随時、順次、進めていくということですので、個別にお話を聞く機会もあるかと思ひますが、よろしくお願ひいたします。さらに熟度をそれぞれ上げて、タイミングを見てスタートさせていくということにさせていただきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

議題4 かわさきパラムーブメント推進ビジョン案について

(福田市長)

次の議題は、「かわさきパラムーブメント推進ビジョン案」についてでございます。これまでの議論を踏まえてとりまとめたものとなっておりますので、ご確認をお願いします。

資料7. 8 説明

(佐藤係長説明)

パンフレット案説明

(デザイナー宮坂氏説明)

(福田市長)

推進ビジョン案について、何かご意見などありましたらお願いいたします。

(山田委員)

この20年のパラリンピックが契機で、パラリンピックが重要ということはわかりますが、パラリンピックの身体障害者の定義、すべての課題解決という視点から考えたときに、この1ページに書いてある左の下、障害のある人が生き生きと暮らす取り組みですから、障害者の方の視点をですね、強調していただきたいと思います。

(中森顧問)

パンフレットの大きさはどれくらいですか。

(山本課長)

パンフレットにつきましては、B5横版の見開きです。A4より若干小さいような30ページほどの冊子になる予定でございます。

(中森顧問)

実際に見て見なければわかりませんが、ちょっと小さいかと。報告書にはいいかと思いますが、見開きで8ページくらいの簡略版も必要ではないでしょうか。

(山本課長)

基本的には市民の方々にご理解していただくための広報資料として作成する予定でございますが、今中森顧問のおっしゃられる概要版についても検討をさせていただきます。(中森顧問)

子どもにも見せるような、川崎市はこういう取り組みしてるというのをアピールしたものがあつたりとか、また障害者に特化した部分でダイジェスト版があってもおかしくないのかと思います。A5で30ページという分量が気になりました。

(福田市長)

ありがとうございます。ご意見を踏まえ工夫していきたいと思います。特に子どもの視点というのは大事な視点かと思えます。ありがとうございます。

(中森顧問)

マンガもいいかなと思いました。

(土岐委員)

具体的な取り組みの中で、カワサキハロウィンというのをいただいでいて、私はラチッタデラという商業施設でこのイベント制作を担当しております。ハロウィンの仮装イベントは1997年にスタートしまして、今年20周年迎え、何か今までとは違った取り組みをやってみたいなという中で、このパラムーブメントの流れで真面目に検討できないだろうかと思っています。けれどもいざ何か具体的にやろうと思うと結構難しいなと戸惑いがあります。今、ここに記載してあるように、健全者も障害者もすべての人が楽しめるというのを具体的に実現するにあたって、果たしてそこに参加していただくことが可能なのかと考えると、すごく難しい問題がいろいろ出てくるんです。じゃあ、他の方法はと考えると、そもそも参加したいのかなですか、あるいは、障害がある方用のプログラムを提案するのがいいのか、そうではなく、むしろ、一般の方も障害の方も同じように楽しめるのがいいかなと悩んでおります。ただそれを口で言うのは簡単ですけど、色々ハード面での規制の問題もあり、皆さんにお知恵をいただきたい、相談にのってほしいと真面目に思っています。

それともう一つ、カワサキハロウィンで考えているのが、障害者だけでなく、LGBTのこともラチッタデラとして何かできないかと思っていて、というのが私どもの施設が映画、音楽、芸術、そういったものを行っている、たとえばゲイカルチャーとかLGBTのクリエイティブな

才能のある人が周りにいつもいて、そういう文化を受け入れ、一緒に育てていくというか、メッセージを発信できないかと思いはじめていますが、いざ、一步踏み出そうとした時に、それがパフォーマンスっぽく見えてしまったり、上っ面なイメージになってしまうことを恐れたり、色々な悩みが出てきます。

そういったところ、さっき飲食店の話にも出ていましたけれど、どう取り組んだらいいんだろう、あまりにも知識がない、あまりにもふだん接点がない、何をしたらいいのか悪いのか、そもそも良いか悪いかということではないのかということすら分からない。本当にそこから、全然不勉強だと感じています。こういう機会ではいろいろな方に会えるので、ぜひ相談にのってほしいという風に思っています。

(福田市長)

ありがとうございます。

(大塚委員)

今まで話されてきた中で、いろいろ共通するところがあって、僕はこれがポイントではないかと思うのは、障害を正しく知ることです。たとえば私、車椅子に乗っていますが、どういう場面でお手伝いをしてほしいか、本当は障害者自身が言えなくちゃいけないんですけど、ただ言える人ばかりではないので、そういう部分を、正しく障害を知っていただくことによって、どういうアプローチをすれば良いかということ、例えば講演会だったり、勉強会だったり、やらせていただいたほうがいいのかと感じています。

そして、もう一つ。僕、川崎のハロウィンが20周年とは知らなかったんですけど、これは、障害をお持ちの方々はパレードに参加されているのですか。

(土岐委員)

主催者側が曖昧な答えしかできず申し訳ありませんが、してる人もいるし、できない人もいます。規約の中には何もないので。

(大塚委員)

一つ提案したいことがあって、僕が持つてるパーソナルモビリティ、will というものがありますが、障害のある方も無い方も同じように乗れる、わくわくして乗れる。須藤さんの「超福祉展」でもあったんですけど、誰もが乗ってみたいと言えるモビリティなんですね。そういったものを、例えば市役所の目の前の通りを封鎖する感じで、ハロウィンのときに、例えばマリオカートの仮装をした人が障害者でも健常者でも、あのパーソナルモビリティに乗ってしまう。任天堂さんにスポンサードしていただいて、映像なりプロモーションなりつくっていただくとか、そういう風に一般の方とか子どもたちが、楽しみながら、なんだこの乗り物？とか来ていただいて、障害のある人も一般の人も混ざり合っていていいよね、っていう意識の部分で改革していくことが必要なんじゃないかなと思いました。

(福田市長)

ぜひ今後このプロジェクトをやっていただく上で、みなさん様々な知見をお持ちなので、またぜひ参加していただきたいと思えますし、メンバーはぜひご提案者以外の方にも入っていただくのが良いですね。まだ進み方について、ちゃんと決まったものがないので、土岐さんのご発言についても、色々な視点を入れながらやっていきたいと思えます。

去年のハロウィンはですね、特別支援学校の子どもさんを、2名様でしたがご案内して、市営バスをハロウィン仕様に変えて、特別支援学校の子どもさんたち2名に来ていただいた。一緒にいらしたその親御さんも、お子さんも、一生の思い出だと言って、すごく喜んでくれました。あのときはたった2家族ではありました。でも、トライアルではありますよね。それが、土岐さんと同じように、どうしたらいいんだろうと迷いながらやった部分はありますが、そういう風なチャレンジがあっただけじゃないでしょうか。一年の、単年度の話ではありませんし。今年はどうだった、来年はもっとこうしたらいいんじゃないかというのがどんどん出てくると良いと思います。

須藤さんのピープルデザインの企画で、障害者の皆さんもスタッフとしてハロウィンに参加していただいているんですね。

(須藤委員)

去年は136名の知的障害の方々がお掃除係とあとは警備誘導係として、土岐さんのところからお仕事を頂戴して、4時間、ギャラありでいい汗をかかせていただきました。

たぶん土岐さんのお悩みというのは、シンプルなもの、もしかしたら市民の皆さんの総論に近い感覚が含まれていたように思います。混ざっていききたい、一緒につくっていききたい、でもどうやったらいいかわからない。なぜならば接触することに慣れてないということ。では、慣れていない状態をどうやって慣れている状態にするか。そういったフェーズなんだと思うんですよね。そういう意味では、これいいんじゃないのという体験を、まずやってみて、小さな失敗を含めてそこを乗り越えていくプロセスそのものも共有していきながら、ここは成功だったけど、ここは失敗だったというようなことを共有しながら、まさに市民を巻き込んでつくっていくのが良いのではないのでしょうか。

(福田市長)

そうですね。

(須藤委員)

一つ課題があるとしたら、実はそれを取り組むときの一番のバリアがあります。実はこれ、従来の福祉にまつわる職員の皆様。ならびに行政の皆様と比較的意識のバリアが高いです。ちなみに川崎市の行政の皆様は極めてフレキシブルです。むしろ歴史の長い社会福祉法人さん。これは誰がいいとか悪いとかではなく、事実の傾向として申し上げます。「何かがあったらどうするの」というご心配ですとか、イベントはおおむね土日開催されて、職員さんのお休みの日だったりしますので、それでなおさら腰が重くなると。そこはこのような壁をいかにこやかに変えていくか、それがはじめにコンテンツありきの、私たちのアイデアの見せどころかな、という感じがします。

(福田市長)

そうですね。ありがとうございます。

(中森顧問)

実際ここにいらっしゃる方は、この動きというのはよく理解していらっしゃると思うんですね。でも川崎市全域として考えたときに、区長に対してもこういうことをしっかりと説明されて、それぞれの区もそういう風に動いているのかなあというのが、一つ疑問です。やっぱり市長が言って、区長が言って、その三角形の下にムーブメントの底辺が広がるように、このムーブメントの動きを理解してるかどうかが重要ですね。一番インクルーシブな社会の組織が何かというと、僕は自治会とか、学校で言うたら小学校とか中学校の学級だと思います。そういう単位が、障害者の方たちも自分たちも楽しめるハロウィンを、グループでつくって参加しようよという気運を持っていくような。自治会でもいいんだし、小学校の学級でもいいし。1人2人混じってるケースが多いと思うんですよね。特別支援学校の場合は同じ障害の方が一緒だけでも、今問題なのが、ぼつんと行ってる子どもが一番情報も何も知らない。市長が2020年に向けたかわさきパラムーブメントを全市あげてやりましょと、ムーブメントの中の一つにすれば可能だと思います。学校というのはハードルが高いです。年間の行事が決まっていますので。でも、市長が、教育長がやれば、それはもう年間通した授業の一貫にするとか、こういう手もあるかと思えます。

(福田市長)

ありがとうございます。ご意見の中で、区長も全員意識整っているかというところですけども、庁内の推進体制のところには区長も入っておりますので、それこそ3000人いる職員のすべてが同じ気持ちでいるかということ、まだそういう段階になってないという風に思いますが、しっかりと認識を一つにして取り組んでいきたいと思っております。

推進ビジョン案につきましては、明日からパブリックコメントで、市民の皆様からご意見をいただくことになっております。3月16日までご意見をいただくことになっております。今日の資料をまたご覧になって、16日までにもしご意見ありましたら、ぜひご連絡いただければと存じます。

あと時間が若干残っておりますが、議題に関わらずというか、これまでの議題を含めて、何か言い足りないこと等はございませんか。

(遠藤委員)

質問ですが、これを市民に見ていただく際にこういった形で情報提供を、たとえば何をつくってどこに置くとか、どこからダウンロードできるとか。

(福田市長)

まだ冊子案みたいのはできておりませんが、行政計画についてはパブリックコメントとして形式が決まられておまして、それに基づいて、インターネット、ホームページを通じて出て行くということになります。

(遠藤委員)

それはどこからダウンロードするんですか。

(福田市長)

川崎市のホームページになります。

(中森顧問)

それは障害の関係の色々な組織にこれを出しますよと言って、周知してもらったらどうですか。

(遠藤委員)

メディア発信として、市民にどういう風に情報提供していくのというと、だいたいソーシャルネットワークなんですね。若い人によって、見るものが違って、我々クリエイティブの業界でいうと、おっさんたちがフェイスブックで、若い人たちがツイッターで、リンクが出てきて、リンクでつないだウェブサイトで見erるんですよ。それに対して、やっぱ発信力が川崎市さんが持つるメディアの中では圧倒的に足りないと思います。それに対して参考になるのが、この業界でいうと、日本財団パラサポ、あそこは発信のメディアが用意されていて、あそこに行けば情報があって、何か良い情報が載ればそれに対して誰かがつぶやいて、それに対して情報が集まるという流れがあります。先ほど中森さんが仰った通り、たぶんあの冊子がどこかに置いてあっても、たぶん読まないと思うんですよ。その簡易版、あるいは簡易版がダウンロードできるウェブサイトが用意されていて、そこに行けば情報が入るような仕組みっていうか、情報を伝えるターゲットがあって、それに情報がちゃんと集まって、それに対する情報が用意されているというのが今一つ足りないんじゃないかと思うんです。行政一般に言えますが、もう少しクリエイティブな、ブランディングに対するコストをかけたほうが良いと思います。

(山本課長)

今回のパブリックコメントにつきましては、確かに、各区役所で紙媒体でいつも置かせていただいておりますが、今回はもう少し幅広い対応として、例えば関連団体にリンクを貼ってもらうとか、対応できる場所はあろうかと思っておりますので、今の方法に限らず情報発信力を高めるようにさせていただきたいと考えております。

(唐仁原理事)

新しい28年度の予算の中では、専用のウェブページ、ホームページをつくろうということでその予算を確保して、市のパラリンピックですとか、市の取り組みについて、別のページで紹介するように、次年度には予算を確保しております。

(中森顧問)

ちゃんとメディアに発信してもらったらどうですか。せっかくこの場にいらっしゃるので。

(福田市長)

そうですね。メディアの皆さんよろしくお願ひいたします。本当に、何をやっているのか発信することと、参加を呼びかけるということを幅広くし、多くの方を巻き込んでいかないと、ムーブメントにはならないので、そういった意味の工夫はこれからも絶えずしていかなくてはならないと思っております。

議題5 その他 今後のスケジュール

(福田市長)

では、その他の項目として、スケジュールの説明をお願いします。

資料9 説明

(山本課長説明)

(福田市長)

スケジュール自体はよろしいでしょうか。繰り返しになりますが、それぞれのリーディングプロジェクトは進めていきますが、これだけではないということなので、随時ご提案のほどよろしくお願ひいたしたいと思ひますし、先ほど土岐委員からありましたけれど、委員になっているけれども皆さんのお話を聞きたい、そういうお話もござひますので、ぜひ積極的にプロジェクトに参加していただく、進行しているプロジェクトについてもご意見をいただく、そういう連絡を密にさせていただきたいと思ひますので、ご協力よろしくお願ひいたします。

はい、それでは本日の議事はすべて終了いたしましたので、進行を事務局に戻します。

(山本課長)

長時間にわたりましてありがとうございました。これでかわさきパラムーブメント推進フォーラム第二回推進会議を終了させていただきます。ありがとうございました。

閉会